

東遷達成の重要ポイント 赤堀川の開削。

東京湾に流れていた旧利根川が、現在のように銚子方面に流れる契機となった赤堀川の開削。記録によると赤堀川は元和七年(1621)から承応三年(1654)の間に三度拡幅・掘削され、利根川の水が常陸川筋に流れ込んだといわれています。それらの工事は関東代官頭から関東郡代を務めた伊奈氏の命によって行われたもので、赤堀川は幅の狭い当初、伊奈備前守にちなみ、備前堀と呼ばれていました。

赤堀川の通水により、利根川の水が常陸川へ流れ発展した利根川水系。こうして幕府は、水系全域に目を向け、大規模な普請組合等の治水施策をとって行きます。赤堀川においては、天明三年(1783)の浅間山の噴火により河床が大きく変動した利根川への復旧工事として、文化六年(1809)に大規模な拡幅工事が行われています。



▲赤堀川切広之図
関東口一壘が張土と呼ばれていることから、その台地を削って広げられた赤堀川にこの名前がついています。
[埼玉県立文書館蔵、田口栄一家寄託]

伊奈氏による河川工事

慶長五年(1600)の関ヶ原の戦いに勝って、幕府を開いた徳川家康は、その分身的万能代官である関東代官頭を設置し、積極的な治水、灌がい工事を行かせます。そして利根川において、河川工事に功勞したのが伊奈熊蔵忠次(備前守)です。また、この忠次の次男、伊奈半十郎忠治から右近將監忠孝までの十代、約二百年間にわたって、代官頭、後には関東郡代として利根川の治水や農政に広範な活躍を見せました。

伊奈家が伝えた河川技術は「伊奈流」あるいは「関東流」の名で知られ、普通の洪水は自然堤防や低い堤防で防ぎ、大洪水はその堤防を越流させて、遊水地で滞留させ、それをさらに内側に設けた控え堤で防ぐ方法をとりました。

そして乱流河川を整理したあとは、新田開発と灌がい用の広大な溜井の築造を行います。備前守にちなみ、備前堀と呼ばれる用水路や備前堤などその工事の跡は数多くあります。



▲伊奈氏三代が住んだ「伊奈氏屋敷跡」(埼玉県北足立郡伊奈町)

流域面積最大の河川へ。

会の川の締切り、新川通の開削…、それから60年あまりの後、赤堀川の通水により利根川の東遷事業は概成しました。

その結果、利根川には大小821河川ともいわれる支川や派川が注ぐようになり、流域面積16,840km²という、我が国最大の河川が誕生します。

これは、埼玉県の約4倍の面積に匹敵し、今日では、この広大な流域に約1千万人を越える人々が暮らしています。

【東遷事業が実を結び活性化した舟運】

利根川の整備は、その後発展する江戸の経済を支える大動脈として機能しました。領主の運米をはじめ、麦、大豆、たばこ、荒物、酒、醤油、木材、銅、生糸、織物など、関東、東北の物資が、利根川、渡良瀬川、江戸川、小名木川を運んで江戸に輸送され、樽廻船、菱運船ルートのいわゆる「下り物」と並ぶ重要なルートとなりました。その結果、利根川には河岸と呼ばれる「川の港」が多く点在しています。



参考文献

- 『利根川百年史』建設省 関東地方建設局／建設省 関東地方建設局 刊
- 『日本の河川研究』小出 博／東京大学出版会 刊
- 『利根川物語』高橋 裕／筑摩書房 刊
- 『利根川』本間 清利／埼玉新聞社 刊
- 『利根川の洪水』須賀 勉三 監修・利根川研究会 編／山海堂 刊
- 『利根川の治水の変遷と水害』大橋 孝／東京大学出版会 刊
- 『利根川治水ものがたり』大谷 貞夫／(財)河川情報センター 刊
- 『川岸に生きる人々』川名 登／平凡社 刊
- 『アーバンポタ No.19 特集利根川』(株)クボタ 発行

現在、利根川上流河川事務所では利根川に関する歴史、文化、環境等に関する資料(例：明治期の写真、江戸・明治期の絵図、古文書等)を探しています。個人として作成された資料を含めて、これらの資料をお持ちの方は、是非、下記連絡先までお知らせ下さい。場合により、複製のお願いに伺います。

国土交通省関東地方整備局 利根川上流河川事務所
〒349-1198 埼玉県久喜市栗橋北2丁目19番1号
計画課 TEL (0480) 52-3921
URL <http://www.ktr.mlit.go.jp/tonejo/>

322kmの大河誕生物語

利根川の東遷



関東水図(静嘉堂文庫所蔵)

流路を東へ…

【利根川の東遷】

近世以前の利根川は、鬼怒川・小貝川とは水系を異にし、乱流委流をほしのままにしながら、埼玉平野を数条にわかれて、東京湾(江戸湾)に向かって流れていました。これが天正十八年(一五九〇)に徳川家康の江戸入府を契機に、江戸時代の初期約六〇年間において関東代官頭伊奈氏を中心とした、利根川の数次にわたる瀬替工事等が行われた結果、太平洋に注ぐようになり、これによって現在の利根川の骨格が形成されました。

徳川家康の江戸入府を契機に…

天正十八年(1590)、豊臣秀吉が小田原城を落城させた直後、秀吉に従っていた徳川家康は江戸に入府。家康の関東領国は、武蔵・相模・伊豆・上総・下総・上野の6か国で合計240万2千石でした。

この地において、軍事的・社会的整備に乗り出した家康は、家臣団の配置による強固な防衛陣を敷きます。そして極地の実施とともに領国の開発を進めるため、新田の開発や交通路の整備にも着手。そして関ヶ原の戦い(1600年)以後、その整備はいよいよ本格化。ここに、利根川の改修工事が関東の整備として次々と実施されていきます。

利根川の東遷のはじまりといわれる会の川の締切り。

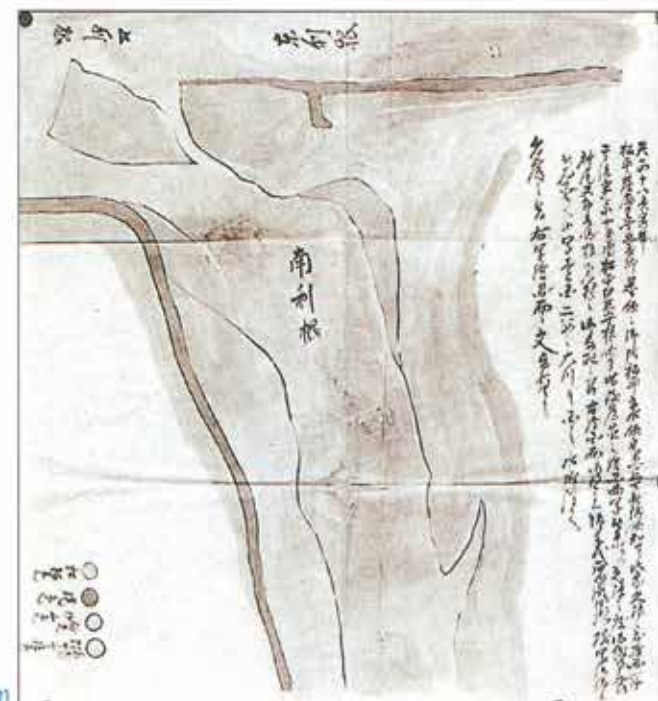
徳川家の浮沈を賭した武蔵国の新田開発と水害防止。それは文禄三年(1594)、家康の四男、忍城(埼玉県行田市)城主、松平忠吉の命により、筆頭家老小笠原三郎左衛門によって開始されます。

三郎左衛門は、埼玉郡上新郷(現埼玉県羽生市)の北で二派に分かれていた一方の、会の川を本川俣で締切ります。

この締切りにより、利根川の幹川は川俣から東流し、北埼玉郡佐波(大利根町)に導かれ、浅間川を幹川としました。さらに河口から東方に走る細流を利用して、派川を開削し、利根川の水量の一部を太田川に合流させました。



▲1594(文禄3)年、会の川筋を締切った「川俣切堀」の碑(埼玉県羽生市)



▲会の川流跡古絵図(埼玉県羽生市源原一家蔵)

